

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 松平 勇二

論 文 題 目

ジンバブエ祭祀音楽の政治・宗教構造

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	嶋田義仁
委員	名古屋大学	教授	神塚淑子
委員	名古屋大学	准教授	佐々木重洋
委員	名古屋大学	准教授	東賢太郎
委員	国士舘大学	教授	鈴木裕之

論文審査の結果の要旨

(論文概要) 本論文は、南部アフリカの内陸国ジンバブエの多数派民族ショナ族の祭祀音楽の政治・宗教構造の解明を目的とする。ジンバブエはバントゥ語族のショナ族とンデベレ族が分布する国であるが、1980年まで白人政権が人種差別支配続けてきたローデシアの後身である。ローデシア時代開放闘争がくりかえされたが、闘争はンビラ(親指ピアノ)という祭祀楽器音楽に起源をもつ音楽に鼓舞され、「チムレンガ・ミュージック」(闘争音楽)というポピュラー音楽形成に至った。そのなかから、トマス・マプフーモという英雄的歌手もうまれた。論者はマプフーモにあこがれてジンバブエにわたるが(2005)、ショナ族ンビラ奏者に弟子入りして演奏技術を習得し、祭祀儀礼にも楽器演奏者として参加するに至った。このことから、政治的解放闘争において民衆の心の支えとなった政治闘争歌と、ンビラが祭祀楽器として演奏される憑依儀礼文化の分析から、音楽の政治的影響力の源泉を明らかにする試みにむかった。その結果が本論文である。

本論文は三部から成る。第1部は、ジンバブエ(石造城塞遺跡)などを残したバントゥ文化の歴史とその植民地化過程を明らかにする。第II部「ショナ音楽の政治人類学」は、ショナ音楽の政治的役割の研究である。解放軍は民衆の教育・情報伝達のために解放軍歌を利用した。その内容がショナ語歌詞の分析によって解明され、次いで、欧米ポップス歌手からショナ民謡歌手、そしてチムレンガ歌手となったマプフーモの来歴とその闘争歌の分析がおこなわれ、ジンバブエ独立後のチムレンガ・ミュージックの変遷も辿られる。独立後ジンバブエは内政の混乱と大統領の独裁時代をむかえる。マプフーモの歌は政府批判にむけられ、マプフーモは2001年アメリカに亡命する。しかしそれ故に、マプフーモの名は世界的に知られるに至った。

第III部「ショナ音楽の宗教人類学」が本論の中心主題である。論者が住み込んだリンガ村の歴史(再入植地)、村落組織と親族関係、生業などの基礎的な民族学的分析が行われた後、村の祭祀音楽三種「娯楽の歌」「祈りの歌」「ンビラ文化」が論じられ、最後にショナ族のムズイム信仰とその儀礼の分析にはいる。ムズイムとは人間に憑依する聖霊の総称で、ショナ儀礼の根幹には精霊による憑依儀礼がある。その際ンビラ演奏がともなう。その演奏者でもあった論者は、精霊体系(天空霊、祖霊、他の能力霊)、憑依の仕組み、憑依儀礼の目的を明らかにする。論者が特に詳しく論じているのは女霊媒師のもとでおこなわれた雨乞い儀礼である。これは農耕祭の間に行われたが、豊作祈願(宗教目的)も、地域社会の問題解決(政治的目的)も、ンビラ音がつくりだす非日常的音楽的空間の中でなされる。しかもンビラ演奏がないと、問題結にひとは動かない。政治、宗教、音楽の一体性がここにみられる。このことより、論者は、祭祀儀礼音楽の影響強いチムレンガ・ミュージックの演奏がともなったジンバブエ解放闘争というのは、このようなンビラ祭祀楽器演奏の中でおこなわれた憑依儀礼とおなじパターンではなかったかと論ずる。

論文審査の結果の要旨

(本論文の評価)

本論文は 2004 年以來 8 回にわたって繰り返されたジンバブエ調査にもとづく研究である。論者は、祭祀楽器演奏習得を目指して、ショナ族演奏者のもとに弟子入りして地方のショナ族村に住んだ。この過程で、論者は楽器演奏のみならずショナ語も取得して暗喩や比喩にみちて現地住民にもときに理解しがたいショナ語歌詞まで理解する能力を獲得した。ショナ族の日常の社会生活文化についても踏み込んだ知識を得た。このような経験と知識にもとづく本論文の議論は、細部においてきわめて詳細でありながら、「ジンバブエ祭祀音楽の政治・宗教構造」という極めて大きな一般的問題解明にチャレンジしている点で、大きな価値が認められる。

アフリカの宗教文化は、大陸北部のサハラ砂漠とその周辺、および東アフリカのワヒリ海岸に広がるイスラーム文化と、アフリカ中南部に広がる伝統宗教・キリスト教の融合文化に大きく分かれる。後者文化は伝統宗教とキリスト教との混交が激しく、アフリカ伝統宗教文化をそれだけ取り出し解明した優れた研究はそれほど多くない。それ故、論者がここで取り組んだショナの儀礼文化研究は、その詳細さと正確さ、またその構造的な理解において、バントゥ宗教文化研究としてははなはだ価値が高い。しかも宗教文化というと、政治・経済的な世俗的下部構造があってその上に載せられた飾りのように論じられることが多いが、本論は、ジンバブエ祭祀音楽の政治・宗教構造がむしろ社会システムの基礎構造をなしていると示唆する。それゆえに霊媒師が政治的にもイニシアティブをもって、反植民地闘争の先頭に立ち、あるいは社会の分裂、統合のキー・パーソンとなる（その端緒が本論でも示されている）。アフリカ政治学研究とアフリカ宗教人類学の結びつきは必ずしも強くないが、本論文は、宗教人類学的な村落の祭祀文化と現代政治学研究の結節点を見出している点で独創的である。

本論文の価値は大卒での学術的価値だけではない。ショナ語理解能力をもった論者は開放闘争音楽の歌詞や村の祭祀音楽の歌詞を詳しく分析し、歌詞内容をあきらかにしている。これだけでも本論文の学術的価値は高い。また憑依儀礼の記述分析も詳細で、宗教学的民族誌的研究としての価値も高い。

本論文の今後の課題は、リング村が白人の旧所有地にショナ族住民が再入植した村だということの、特色や問題点をより詳しく論ずることであろう。これはジンバブエだけを調査していても明らかにならない。何百年という伝統を背負ったアフリカの他の村落文化との比較研究が必要である。

なお論者が調査した時期のジンバブエは、国内政治と経済が混乱した時期でもあった。そんな時期長期間の調査を成し遂げ得た論者の危機管理能力と研究遂行能力も評価に値する。

以上の理由により、本論文を課程博士にふさわしい論文として一同合格とした。